



グラウンドで思いっきり走り回る子どもたち(保養プロジェクトin茨城)。

# 「福島の子ども保養プロジェクト」 に広がる支援の輪

福島の子どもたちと保護者にリフレッシュの機会を提供するため、毎週末行なわれている「福島の子ども保養プロジェクト」。プロジェクトがスタートして約半年、「福島のために」という全国の思いが、力へと変わりつつある。

## 開始から半年 広がる協力の輪

東京電力福島第一原子力発電所の事故から間もなく1年半。福島県では、被ばく積算量を気に掛け、健康被害に不安を感じながら生活している子どもたちも多い。

そんな子どもたちと保護者に、放射線量の低い地域で保養の機会を持ってもらう——。それが「福島の子ども保養プロジェクト」だ。福島県生協連、福島県ユニセフ協会、福島大学災害復興研究所が運営の中心となり、日本生協連、日本ユニセフ協会などが力を合わせ2011年12月に立ち上がった。福島や山形で行なわれる保養企画を主軸に置き、さらに現在は、全国からプロジェクトに協力したいという声が多く上がっている。

## 神奈川県生協連 地域一帯となつて支える

3月30日から4月2日には「春休み福島の子ども保養プロジェクト in 神奈川」が実施された。これは神奈川県ユニセフ協会と、神奈川県生協連が、福島県生協連の要請に手を挙げ実現した企画だ。

福島から神奈川への避難者に対する



毎週末行なわれている保養プロジェクトでは、希望者に線量計を貸し出すことも。写真は、線量計を着けた参加者。

支援を実施してきた「守りたい・子ども未来プロジェクト」が主催となり、同団体と関係の深い神奈川県ユニセフ協会がボランティアを組織して期間中の運営実務を担当。そのほか、コープかながわ、秦野市はだの観光協会、秦野市農協、秦野市、さらに秦野市の近隣企業などが、さまざまな形で支援。地域一帯となり福島の子どもを受け入れた。

福島からは、福島市、郡山市、本宮市、いわき市からの、男児12人、女児22人の計34人（8歳から12歳）と5人の保護者が参加。また、短大生のボランティア2人と臨床心理士が同行した。一行は秦野市の表丹沢野外活動センターに宿泊し、イチゴ狩り、魚釣り



「守りたい子ども  
未来プロジェクト」  
事務局長 梶 雅之さん

や野菜収穫など、自然体験を楽しんだ。この受け入れでは、神奈川県内の「福島のために何かできないか」という善意を生かすための細やかな工夫が見られた。

「守りたい・子ども未来プロジェクト」事務局長の梶雅之さんは、

「多くの方が福島のために何かしたいという気持ちを持っていて、状況を正しく説明すれば協力していただける。ただ、末永く協力を仰ぐには、善意が無駄にならない工夫が必要」と話す。そのために、

「往路で子どもたちが利用したバスを空荷で福島に戻さず、神奈川に避難してきている福島の方々に声を掛け、一時帰宅を望んだ方には無料で乗って帰ってもらう」子どもたちが寝静まってから、保護者の方とボランティアが集まり、コミュニケーションの場を設ける」といったことも行なわれていて、少しでもプロジェクトの意義を深め、多くの人の善意に誠実に応えたいという気持ちが伝わってくる。



「イチゴは甘くておいしいです！ たくさん食べました！」(保養プロジェクトin神奈川)。

## 茨城県生協連 国際協同組合年事業として 子どもたちをサポート

4月21日、22日には「福島の子ども保養プロジェクト in 茨城」が実施された。このときは「2012国際協同組合年」を迎え事業連携する茨城県生協連、JA茨城県中央会、いばらきコープ、パルシステム茨城、茨城県畜産により迎え入れ態勢がつけられた。

「茨城にも東海発電所という原発があります。ひとつととは思えません。隣の生協連としてプロジェクトにはできる限りの協力をしたかった」(茨城県生協連会長理事の佐藤洋一さん)

茨城での保養プロジェクトは春、夏、

秋の全3回に及ぶ企画。今回はその第1回目で、福島県サッカー協会を通じ福島と郡山のサッカーチームに対し参加を募り、男女計3チーム、指導者、保護者を含めた74人が招かれた。

子どもたちはJ2所属のプロサッカーチーム、水戸ホーリーホックの選手によるサッカー教室に参加。その後、「協同組合サンクスマッチ」の名称で協賛試合として開催されたザスパ草津戦を楽しんだ。子どもたちは選手と共に入場するエスコートキッズも務め、ハーフトイムには、「信じよう福島に住む皆の力を 叶えよう福島の明るい未来を」と書かれた垂れ幕を持ち、サッカーフィールドに沿って行進をした。

サッカー教室の実施や入場チケットの提供は、ホーリーホック主催試合への協賛に伴うサービスだ。

今回は、茨城県内の生協、JA、漁協、森林組合などが、事業連携し実施を決めていた国際協同組合年の広報活動と併せた福島支援となっている。ここにも関係者のアイデアが光っている。

「国際協同組合年という記念の年ですから、大きなビ



ハーフトイムには、子どもたちがサッカーフィールドの周りを行進して、福島をPRした(保養プロジェクトin茨城)。



茨城県生協連  
会長理事 佐藤洋一さん

ジョンを打ち出すような広報活動も考えました。でも、目の前で大変な環境で頑張っている子どもがいて、それをサポートすることこそ協同組合の理念そのもの。そんな意見が出たんです」と佐藤会長は経緯を語る。